+plus
Museum
Program

interview series

vol. 01›05

INTERVIEW

Exploring the new relationship
between community and museum

インタビュー・シリーズ

Insight on Site
地域社会とともにあるミュージアムの現場に学ぶ

インタビュー・シリーズは、日々地域社会のさまざまな主体と「対話」し、
地域課題に「寄り添う」北海道内各地のミュージアム学芸員および
ミュージアムに携わる関係者を対象に、個々の課題やそれに対する
取組みに関する知見を集めていくという企画です。
インタビューの成果は、動画コンテンツ、
冊子のインタビュー集、ウェブサイトを通して情報を発信し、
今後の事業においてフィードバックしていきます。

contents

「見ること」と「話すこと」
佐々木亨 ―― 04

Vol.01 ミュージアムとの協力関係による地域の価値を伝えていく
取材先：矢野ひろ（株式会社ノーザンクロス・NPO法人北海道遺産協議会事務局）
報告者：卓彦伶 ―― 06

Vol.02 地域の課題に幅広く対応し、人々の生活にミュージアムを根付かせる
取材先：持田誠（浦幌町立博物館）
報告者：卓彦伶 ―― 08

Vol.03 学芸員が「広告塔」となり、ミュージアムの魅力を伝える
取材先：中村圭佑（士別市立博物館）
報告者：卓彦伶 ―― 10

Vol.04 人々の学びを支援し、地域の「文化力」を向上させる
取材先：山田央（七飯町歴史館）
報告者：卓彦伶 ―― 12

Vol.05 プラスされた「美術館」としての顔が、街に新しい風を吹き込む
取材先：細矢久人、立石絵梨子(苫小牧市美術博物館)
報告者：今村信隆 ―― 14

インタビュー・シリーズの「なかがき」
今村信隆 ―― 18

「見ること」と「話すこと」

佐々木 亨
北海道大学文学研究院教授

ミュージアムの来館者調査といったときに、どんな調査形態をみなさんは思い浮かべるでしょうか。展示室の出口付近に「お客様の声をお聴かせください」という控えめな誘い方をしているパネルの前に置かれているアンケートをイメージする方もいるでしょう。最近では、出口のパネルに印刷されたQRコードをスマホで読み込んで、アンケートの設問に回答する場面を思い浮かべる方も多いかも知れません。

私は、来館者調査をミュージアムから依頼されることがときどきあります。その場合、調査の目的をしっかり伺った上で、どんな調査手法を選択するのがよいかを双方で検討していきます。最近、あるミュージアムで実施した来館者調査では、展覧会の来館者に対して了解をいただいた上で、展覧会場内での観覧行動についての観察調査、観覧後のインタビュー調査、さらに来館前後それぞれ一ヶ月間の生活実態に関するアンケート調査を実施しました。併せて、この一連の調査対象者以外には、展覧会の出口で全員に声かけした上で、アンケート用紙への記入をお願いしました。これだけ多くの調査手法を用いて、来館者の実態を調査したので、目的に沿った有効なデータがたくさん収集できました。

この調査では、観察調査、インタビュー調査、アンケート調査の3つの手法を組み合わせています。つまり、1)見ること、2)話すこと、3)きくこと、です。お客さんが展覧会を観ているおおよそ1時間の行動を観察させてもらい、観覧後にあらかじめ用意していたテーブルに座ってもらい、展覧会場での動線や同伴者との会話発生箇所を記録した観察データを見ながら、20〜30分程度インタビュー項目に従ってお話しを伺います。しかし、しばしばその項目から逸脱します。いや逸脱させています。例えば、同伴している孫とのこれまでの関係性と、自分自身の過去の仕事体験から、いまここに二人でいることの必然をゆっくりと語ってくれた60歳代の女性がいました。これはまさにお二人の人生にとってミュージアムはどんな意味を持っているのかを話された瞬間でした。ほかのミュージアムでも出口でインタビュー調査のみを行うことがありますが、このような深い思いを伺うことができたという経験がありません。

この一連の調査をミュージアムで実施して、私はあらためて「見ること」と「話すこと」を同時に行う大切さを実感しました。つまり、そばに立ち来館者を見ること、向かい合って話すことからわかることが、いかに深くて豊かであるかということです。

今回、プラス・ミュージアム・プログラムでは、卓先生を中心としてプログラムの教員が、北海道内のミュージアムに直接伺い、展示を見たり、バックヤードを見学したりしながら、インタビューを続けています。つまり、フィールドワークをしながら、当事者と対話していると言えます。文化社会学者の佐藤郁哉氏は『フィールドワーク-書を持って街に出よう(増訂版)』(2006)の中で、インタビューのさまざまなタイプについてこのように書いています。

サーベイなどで用いられるフォーマルなインタビューの場合には、就職面接のように聞き手がワンランク上で、話し手がそれに対して一段下におかれ、「聞き出す」「情報を収集する」という性格があります。一方、フィールドワークにおけるインタビューでは、この立場が逆転し、「教えてもらう」「アドバイスを受ける」という表現がふさわしいインタビューとなります。加えて、聞き手が必ずしも「インタビューアー」というようなフォーマルな役割で質問しているわけではなく、一対一という改まったフォーマルなセッティングで行われるわけでもないとしています。つまり、いろいろなところで折に触れて質問しています、と。

本プログラムのインタビュー・シリーズは、まだはじまったばかりですが、ミュージアムの現場に直接伺い、「見ること」と「話すこと」を大切にするフィールドワークを基本として、展開しています。このことで、それぞれのミュージアムについてのインサイトが深まり、それを広く共有することで、ほんとうの意味での「対話」と「寄り添い」が実践できるのではないかと、私は信じています。

ミュージアムとの協力関係による地域の価値を伝えていく

矢野　ひろ（株式会社ノーザンクロス・NPO法人北海道遺産協議会事務局）

まちづくりの観点から地域の「遺産」を発信・支援活動

矢野氏は北海道にあるまちづくり会社の一員として、NPO法人北海道遺産協議会の事務局業務を担っている。NPO北海道遺産協議会は現在74件ある北海道遺産の魅力を広く発信していくとともに、これらの遺産を地域で守り伝えていく担い手の活動を支援し、地域の中で活用しながら地域の活性化につなげていくことを目的とする組織である。これまで、北海道遺産に関する情報を収集する際は各地域にあるミュージアムや歴史に詳しい市民、語り部など専門家に依頼し、そのたびごとに情報を入手してきたが、北海道遺産の件数が増えるにつれて、事務局内に散らばっている情報を整理していく必要が出てきた。今後は各地のミュージアムや各地域の担い手との連携を進めて、北海道遺産に関する情報の追加・再発見および地域の人々との協力関係を築いていくための仕組みを計画しているという。

例えば、北海道遺産協議会ではまちづくり団体を対象とした助成金事業を展開しているが、最近はまちづくりに視点を置くミュージアムが積極的に助成金を活用する事例も多くみられるようになってきた。そのなかで、今年度(2022年度)に標茶町博物館「ニタイ・ト」、霧多布湿原センターを会場に、「北海道遺産フォトコンテスト」の入賞・入選作品を中心に展示する「北海道遺産巡回写真展」では、展示室の借用にとどまらず、ミュージアムと地域の人々とともに展示を制作することを試みたという。まちづくりに関心を持つミュージアムや地域の人々との関係性を深めることによって、地域の魅力をより多くの人に伝えることができると期待されている。

ミュージアムとの協働を通じた相乗効果に期待

北海道遺産の取組みは「まちづくり」という大きな目的のもとで展開されている。そのため、情報の収集活動においては、地域で活用できるものとして地域の資料や情報がどういう形であるべきかを、ミュージアムの学芸員と相談しながら進められることが望ましい。観光や生涯学習、芸術など多様な角度から地域の魅力を発信していくことを見据えて、ミュージアムとともに地域資料に関する情報収集のモデルづくりを進めていきたいと矢野氏はいう。その理由は多様な背景を持つ来館者を対象に展示の文脈、資料の説明を伝えるために常に考えたり、実践したりしている学芸員の「表現力の豊かさ」だ。ミュージアムを飛び出して、北海道遺産でも力を発揮してほしいという思いを明かした。

矢野氏は長年まちづくりに携わってきた立場として、横のつながりに着目したネットワークづくりのノウハウを持っている。北海道遺産の活用について、北海道遺産は、北海道全体の歴史や文化、生活文化などを取り上げたストーリーとして構成されているため、ミュージアムが横断的に他の地域をテーマに取り上げる際には、接着剤のような役割を果たすことができると話し、ミュージアムとの関わりに意欲を示した。

ミュージアムとの協働は、学芸員の多様なスキルを吸収するとともに、今後の北海道遺産を発信していくためのネットワーク作りにもつながる。そしてミュージアム側も北海道遺産を活用した横のつながりが展開されていくという相乗効果が期待されている。

（執筆：卓 彦伶）
取材日：2023年1月13日

地域の課題に幅広く対応し、人々の生活にミュージアムを根付かせる

持田 誠（浦幌町立博物館）

身近に相談できる存在としてのミュージアム

浦幌町立博物館は、浦幌を中心とする東十勝や白糠丘陵一帯の歴史、文化、自然史に関する資料を収集・調査し、展示している。自然史資料から考古資料、民俗資料まで、地域資料を幅広く扱っている地域博物館である。今回のインタビューでは、同館の持田誠学芸員にお話を伺った。身の回りで困ったことや調べたいことがあった場合、地域の人々が気軽に相談できるよう、様々な形で対応することをミュージアムの基本的な姿勢としている。図書館が併設された複合施設にあるため、相談は図書館を通じても受け付けており、地域の人々から日常的に利用されている。名前の分からない石を拾った場合や、庭で珍しい鳥が死んでいた場合、あるいは先祖の話や家の片付けで出てきた古い写真についての相談など何でも受け付ける。相談者の中で多いのは高齢者で、自分の家から出てきた古いものや町の歴史に関する相談が多く寄せられるほか、小学生からは身近なことや学校の授業に関連したことを相談に持ち込んでくることも多いという。

どこに相談したらいいかわからないようなことをミュージアムに持ち込んで、ミュージアムを介して色々なことを解決していくというような空気感が作られている。

地域の一員として、ともに地域課題に向き合う

持田氏は地域の多様な課題に対して「自分自身もまちの一員になるということが非常に重要」とし、博物館内部と外部での活動を通じて積極的にかかわっていく姿勢を示した。

浦幌町では過疎化や高齢化が大きな地域課題になっているなか、これらの課題に対してミュージアムが直接的な政策提言をすることは難しい。最近、移住者や地域おこし協力隊などの若者によってまちを盛り上げるためのイベントが開催されている。これらの地域活性化につながる取り組みの企画・運営にミュージアムも関わって協力している。また、観光振興という視点からも町の魅力を広く知ってもらうために、浦幌町と隣接する豊頃町が地元の商工会、観光協会や帯広地域の色々な業界と協力して、東十勝ロングトレイルという浦幌町、豊頃町の自然や歴史を見て回る観光ツアーを年に数回企画している。この事業の企画立案に浦幌町立博物館も関わっており、地域資源を新しく見つけて発信していくための地域資料を提供する役割を担っている。

社会教育施設として、ミュージアムは日常的に地域の各年齢層の学びの欲求に応えるために講座形式の事業を展開している。その他には、不登校や学校に馴染めない子供たちが興味を持ったことについて個別に相談を受け、その子どもたちの興味に応じた資料や話題を提供することで、再び学校に通う機会作りの支援も行われている。

市民とともに活動してきた蓄積を地域の持続可能な発展に還元

浦幌町立博物館は2015年の夏から毎月第1土曜日に豊北海岸で「豊北植物調査会」を開催している。地域の人々と一緒に植物フェノロジー観測を行ってきた7年間のデータが蓄積された。持田氏は現在、得られたデータを環境省の生物多様性センターの「モニタリングサイト1000」に提供することを検討している。これにより、地域の人たちが自分たちの地域について調べてきたことが広く社会に活用され、モチベーションも上がるという。また、豊北海岸は漁業を営む漁師たちが利用する場所でもあり、定置網を傷めないように漁師たちは重機を使い、毎年海岸に打ち上げられた流木を撤去している。しかし、この作業は海岸の希少な原生植物を傷つけてしまうことになる。そこで、環境省の「モニタリングサイト1000」に登録することによって、海岸の姿を様々な立場の人と情報共有をしながら、豊北海岸の資源を100年後に伝えていくための意見交換のきっかけになることを期待している。

持田氏は、地域産業と自然環境保全の調和を目指すために、ミュージアムが長年にわたって蓄積してきた情報を通じて話し合いの場を作り、助言・提案を行っていく姿勢を改めて示した。

（執筆：卓 彦伶）
取材日：2023年1月13日

学芸員が「広告塔」となり、ミュージアムの魅力を伝える

中村 圭佑（士別市立博物館）

個人として地域活動に参加し、ミュージアムの存在を支える

士別市立博物館は1981年に開館し、昨年(2022年)に40周年を迎えた、士別地域の歴史、自然や文化芸術を扱う総合博物館である。中村氏は歴史を専門とする学芸員であり、主に屯田兵の開拓から現在に至るまでの歴史に関する展示の準備、講座の企画運営を担当している。

地域と関わる姿勢について、中村氏は「個人として活動しながら学芸員としての自分を外に広げていく」と語った。自身が担い手として関わってきた郷土芸能「日向神代神楽」の伝承活動を例に挙げ、地域の人々との交流を深めることで、ミュージアムの活動に興味関心を持つ市民が増えた。また、これまでの関係性を活かし、郷土芸能の記録として日向神代神楽を動画で撮影する際にも、市民からの協力を得られたという。学芸員が個人として地域に関わった活動は博物館の活動に直結している事例である。

中村氏は、学芸員は自ら地域に出向かい面白い話題を提供し、外部に向けて博物館の魅力を伝えていくことが大切であると考えている。さらに、ミュージアムの存在意義を支えるのは、展示だけではなく、地域に発信していく学芸員の力も必要不可欠だと語った。

多様な講座を通して、地域に開かれていく

士別市立博物館は年間を通して、館内の講座と出前講座を多数開催している。ミュージアムの講座を通じて、市内外の人々に来てもらい、士別に関わってもらうことはミュージアムが地域に貢献する可能性の一つであると説明した。また、講座を通じて地域のまちづくりにも貢献したいという思いを持ち、士別の歴史に絡めて地域の活性化につながる取り組みも今後積極的に考えていきたいという。

特に子供を対象に地元の歴史や文化を学んでもらうための講座を頻繁に開催している。学校の要望に応じて、学校に出向いて実施するものもあれば、フィールドワークに出て地元のことを知ってもらうこともある。他には、「士別市の今と昔」という士別市の昔の写真の撮影場所を訪れて、今の風景と見比べて、士別市の街並みの変化を博物館の学芸員が解説するYoutube動画も学校の授業で活用されている。

教育委員会社会教育課の主催事業「土曜子供文化村」では、士別市立博物館は「ふるさと自然歴史体験館」というプログラムを担当している。小学生4年生以上を対象に、士別の自然や歴史を感じてもらう内容で、通年で募集している講座である。リピート参加の子供も多く、たまに町に行ったら、この活動に参加した子供に「あ！博物館の人だ」と指をさされることもよくあるという。

最近は漫画やゲームの影響で昔の道具や民族の話題に対して興味を持つ子供が増え、博物館の展示物がゲームの中に出てくるものとして知られている場合もある。現在、ミュージアムの見学は小学校3、4年生が中心になっているが、今後はさらにミュージアムを利用してもらうために、学校の先生と協力して、全学年が博物館見学に参加できるようにすることや出前授業を充実していくと話した。

（執筆：卓 彦伶）
取材日：2023年1月18日

人々の学びを支援し、地域の「文化力」を向上させる

山田 央（七飯町歴史館）

地域の学びの拠点「町民の研究室」

平成10年にオープンした七飯町歴史館は、歴史・民俗だけでなく、地域の自然、産業なども扱う総合博物館である。年間３、４回ほどの企画展や自然観察会、歴史講座など開催している。また、学習サービス室には約5000冊の蔵書をもつ図書の閲覧スペースが併設されており、貸し出しも行っている。歴史、自然や民俗など幅広いジャンルの図書を毎月追加している。今回のインタビューでは、博物館の業務全般を担当する同館の山田央学芸員に話を伺った。

七飯町歴史館は「町民の研究室」というコンセプトを掲げ、ミュージアムの展示や活動を通じて、「気軽に自分の知りたい分野に関して扉を開けられるような場所」になることを目指している。山田氏は、地域の人々の学びを支えるためには、現在の七飯町について収集・記録することが重要であると語った。具体的に、地域にいる自然観察員とともに町内の植物を採集し、腊葉標本を作製してデータベース化する活動のほか、昆虫の採集、標本化も行っている。これらの情報資料が蓄積され、ミュージアム内外で活用されることによって「博物館自体がデータベースの核になる」と期待している。

また、見学者が実物に触れたり、体感したりすることを重視し、郷土史研究会、来館者の様々なニーズに柔軟に対応している。観光客からの要望にも応え、開拓使や牛乳の歴史について話すこともあるという。

レファレンスを通じて地域に寄り添う

山田氏は、ミュージアムが持つ地域の歴史、自然に関する情報を使ってもらい、より高い正確性を持ったレファレンスを行うことがミュージアムの役割の一つであると話した。地域のブランディング化において、ミュージアムが情報の提供と監修の役割を果す事例として、七飯町では産業が主に農業であり、リンゴの商標登録を進める際に、七飯町のリンゴ栽培の歴史や果樹栽培の特徴に関する情報提供を行ったことを挙げた。

また、地域から文化財の保存に関する相談も多数寄せられている。2013年に閉館した男爵資料館の建物は大正期に導入された木製サイロ、牛舎などがあり、当時では最先端だった蒸気トラクターも収蔵されている。その一部の展示物は、七飯町の道の駅にある男爵ラウンジに移されたが、その他の資料については、七飯町歴史館は男爵芋や川田良吉に関する資料を収蔵されているため、文献資料は同館が引き受けることになった。しかし、建物の移設は難しいということもあり、記録だけでも残すために、北海道博物館に相談し、建物の記録と関連資料を散逸しないように後世に残す方法を模索している。

地域の歴史と文化財の保存において、ミュージアムは重要な役割を担っており、各方面の専門家を繋ぎ、地域の人々とともに模索していくための場を作っていくことが必要だと山田氏は考えている。

コロナ禍による教育普及活動への気づき

山田氏は地域課題の解決において、ミュージアムが果たすべき役割について、「文化力を上げること」であると話した。七飯町歴史館では、小学校5、6年生を対象とした体験プログラムを行っているが、コロナ禍で募集上限を10名程度に減らし、少人数での開催になった。参加人数を減らすことによって、同じ目線で子供の興味に沿ってゆっくり対話する時間が増えたと実感しているという。このような交流を通じて、ミュージアム好きな子供が増え、ミュージアムを含めた文化施設を身近に感じ、ミュージアム・リテラシーが育まれることに期待している。

（執筆：卓 彦伶）
取材日：2023年1月25日

プラスされた「美術館」としての顔が、街に新しい風を吹き込む

細矢 久人・立石 絵梨子（苫小牧市美術博物館）

リニューアルで「美術館」をプラス！

1985年の開館以来、長らく市民に親しまれてきた苫小牧市博物館は、2013年にリニューアル・オープンする際に展示室を増設して、名称を「苫小牧市美術博物館」と改めた。郷土の歴史や自然を扱う博物館としての従来の機能に加えて、さらに、「美術館」としての機能を強化することにしたのである。今回は、同館で美術を担当する学芸員の細矢久人氏と立石絵梨子氏にお話をうかがい、美術館という新たな役割を付与されたミュージアムと地域社会とのかかわり方について、教えていただいた。

確かな「素地」の上に

リニューアルによってもたらされた新しい美術館。ただ、インタビューの中でお二人がまず口にされていたのは、そうした新しさの前に存在していたという、「下地」ないしは「素地」についてだった。苫小牧市美術博物館は、専門的な美術館としては、約10年の歴史をもつ。しかし、それ以前に、苫小牧市博物館時代の蓄積があったことが実は極めて重要だったと両氏は口を揃えるのである。

立石氏が教えてくださった一例は、リニューアル・オープンよりはるか以前、1986年に開始されて現在まで続く、「大学講座」という同館のレクチャーシリーズである。40年近くにわたる講座には今でも毎年多くの申し込みがあるという。年度の最初に入学式を、最後には卒業式を行うだけでなく、出席回数や参加年数に応じて「学士」「修士」「博士」の学位も授与される。こうした息の長い活動によって、ミュージアムが学びたいという人びとの願いに応え、地域の暮らしの中に位置づけられてきたという点は、見逃せない。

また、細矢氏は、美術館機能が付与されて再出発した苫小牧市美術博物館だが、美術以外の専門家と館内で連携できる点も、同館の大きな特色だという。ごく一例だが、たとえば現代アーティストが地域のことをリサーチして作品を制作しようとする際に、歴史や考古、自然史などを専門とする学芸員の知見や、関連するコレクションの蓄積がものを言う場合が少なくないのである。

こうしたお二人のお話によって改めて気づかされるのは、美術館が突如として上から降ってきたのではないということだ。先人たちが培ってきた文化的土壌があり、現代を生きる市民の切実な願いがあり、苫小牧市博物館時代の知見やコレクションの蓄積がある。そのうえにはじめて、現在の新しい美術館が根を下ろすことができているのである。

美術館を積み上げる

こうした蓄積の上に立ちながら、同館はさらに、さまざまな新しい歴史を積み重ねはじめている。教えていただいた取り組みのひとつは、地域の子どもたちが参加する「子ども広報部 ぴとこま」という活動である。リニューアル・オープンの少し前から始まり、現在まで続いている。ミュージアムの広報紙「ぴとこま」を編集して展覧会の魅力を子どもの目線で発信したり、子どもたちの会話から生まれた作品解説カードを展示室内で紹介したりと、幅広く活動してきた。立石氏によれば、ここでポイントになるのは活動に参加するアーティストの存在だという。もともとこの活動は、苫小牧市在住のアーティスト・藤沢レオ氏と氏が参画するNPO法人樽前artyプラスが主導し、ミュージアムと一緒になって行ってきたものである。子どもたちにとっては、いつも触れ合っている大人とは少し違う、アーティストという存在が重要なのだろうと立石氏は述べていた。普段の学校生活からは離れ、教室とは別のコミュニティの中に置かれ、アートやアーティストという不思議に出会う。そこには確かに、ミュージアムならではの、風通しの良い遊びと学びがありそうだ。

もうひとつ、同館の取り組みで特筆に値すると思われるのは、主に細矢氏が手がけてきた企画展「NITTAN ART FILE」シリーズである。2015年に第1回展を実施し、2022年の第4回展まで続いてきた。地域の作家、地域にゆかりのある作家を中心に、毎回数名の現代アーティストを紹介する意欲的な試みである。細矢氏は、現代美術はどうしても好き嫌いが分かれ、ときとして人びとを二分してしまうこともあるという。しかしその一方で、見慣れた「地元」をアーティストの目線で異化して提示す

子ども広報部「ぴとこま」編集作業の様子（2023年）

ることの意義は、氏が指摘するとおり、決して小さなものではない。本シリーズ展は、アートによって分断ではなく対話をもたらそうとする、同館を代表する継続的な試みだと言えるだろう。

ちなみに細矢氏によれば、苫小牧市は「ほどよいサイズ感」をもち、市民や地域とも「ほどよい距離感」をとりやすいそうである。国立や都道府県立のミュージアムほどの大きさがないからこそ、街や人にフィットする活動が比較的自由に出来るということだろう。細矢氏も立石氏も、ともに、より大きな都道府県立のミュージアムでの勤務経験をもつ。そうした経験を踏まえつつ、現在は、街とミュージアムとの心地の良いバランスを楽しんでおられるように感じられた。

美術館を掘り下げる

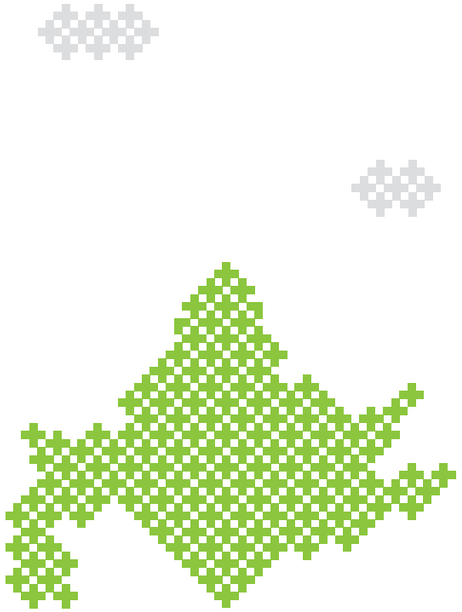
インタビューの最後に、苫小牧市美術博物館はどのような場所なのだろうか、何かに喩えることはできるだろうかとお尋ねしてみた。しばらく悩まれた後で立石氏がおっしゃったのは、博物館は博物館、美術館は美術館であって、他のものに喩えることは難しいという回答だった。確かに、何に喩えてみたところで、それはおそらく、ミュージアムのある一側面を強調することにしかならないだろう。博物館らしさ、美術館らしさを掘り下げる。博物館の仕事、美術館の仕事を突き詰める。それこそが結局は、他の何かでは代替することができないミュージアムならではのやり方で、新しい風を地域に吹き込むことにつながるのかもしれない。

（執筆：今村 信隆）
取材日：2023年2月22日

藤沢レオ《場の彫刻Ⅳ》2015年
（「NITTAN ART FILE：インスピレーション」出品作品）作家蔵（撮影：山岸靖司）

インタビュー・シリーズの「なかがき」

今村 信隆
北海道大学文学研究院准教授



北海道は広い。諸外国と比べればそうでもないと感じられるかもしれないが、それでも日本のなかではかなり広い。九州と四国を合わせたよりも、まだ大きいのだという。日本全土の面積のうち、実に5分の１ほどを占めるのが、北海道なのである。

この広さは、観光で訪れる方たちの眼には、魅力的に映るかもしれない。ただ、住むとなるとなかなか大変なことも少なくない。確かにJRや都市間バスの事業者も頑張ってはいるが、それでも広い北海道を隈なく網羅しているかというと、決してそうではないだろう。おまけに長く手ごわい冬もやって来る。大雪、地吹雪、路面の凍結。速度規制に通行止め。さまざまな気象上の困難が、公共交通機関にも、自家用車を運転するドライバーにも、襲いかかる。

わたしたちがこうした北海道の広さを改めて痛感したのは、2018年度から2020年度にかけて実施した、北海道大学学芸員リカレント教育プログラム（通称「学芸リカプロ」）においてであった。これは、北海道内のミュージアム学芸員や関係者とともに学び直しのための場をつくろうとしたプログラムだったのだが、このとき事業遂行上の大きな妨げになったのが、ほかならぬ距離の問題だったのである。参加者のなかには、たとえば、北海道の釧路市や伊達市、倶知安町や鹿追町といった地域で活躍されている学芸員の方たちがいた。ところが、これらの場所から北海道大学がある札幌市まではいずれも相当な距離がある。一番遠い釧路市から札幌市の距離は約300km。単純にいえばこれは、東京から仙台・新潟・岐阜などに行けてしまうほどの距離なのである（しかも札幌-釧路間には新幹線やリニアが走っているわけでもない…）。参加者は、忙しい本務の合間を縫って、これだけの距離を移動してわざわざ来て下さっていたのだ。もっとも、最終年度の2020年度には新型コロナウィルス感染症の蔓延にともなってほぼすべてのプログラムがオンラインで行われるようになり、距離はさほど問題にならなくなったことは確かである。ただ、それでもやはり、多忙な社会人の学び直しのうえで、距離の克服が大きな課題であることは間違いないだろう。

では、この距離を克服するための手段として、オンライン以外に採りうる方法はないだろうか。そのひとつの試みが、来ていただくのが大変であればこちらからお訪ねしてみよう、という本企画である。距離に悩まされた学芸リカプロを発展的に継承するかたちで、2022年度より、北海道大学プラス・ミュージアム・プログラムがはじまった。この新しいプログラムでは、すっかり身近なものになったオンラインでの事業公開に積極的に取り組む一方で、プログラムの実施者であるわたしたちが、北海道内のさまざまなミュージアムや関係先をお訪ねしてキーパーソンからお話をうかがうというインタビュー・シリーズを試みている。

各ミュージアムが直面している課題には、地域ごとの特性や個別の事情に根差した難しさがあるに違いない。運営体制や携わる関係者も一様ではないだろう。そうした複雑さを、「外からの」、あるいは「上からの」理論や解決法でまとめようとすることには、やはり無理があるのではないか。各地の現場を訪ね、個々の課題やそれに対する取り組みに関する知見を集め、ワークショップ等のかたちで共有し、関係者同士での議論に資することはできないか。そのような思いからはじまったインタビュー・シリーズである。端的に言えば、ミュージアムを訪ね歩く、キャラバンのようなイメージだ。

インタビューには、本学の卓彦伶特任准教授をはじめとして、北海道大学プラス・ミュージアム・プログラムの事業を担当する教員があたる。インタビューの成果は、動画コンテンツとしてまとめ、今後のわたしたちのプログラムに活用していくことを予定している。また、本冊子のような紙媒体やウェブサイトでも、情報の発信と共有に努めたい。加えて、わたしたちのプログラム全体が、「外からの」あるいは「上からの」目線に陥ることがないよう、今後の事業内容の立案にもインタビューから得られた成果をフィードバックしていくことが大切になってくるだろう。

最後に、この短い文章のタイトルについて、一言しておきたい。この文章のタイトルは、少し変な言葉かもしれないが、「なかがき」としてみた。インタビュー・シリーズがはじまる前に、予め置かれている文章であれば、「まえがき」とするのが筋だろう。逆に、一連のインタビューがすべて終了したあとであれば「あとがき」とするのがよさそうだ。しかし、いまはまだ、インタビュー・シリーズは旅の途上にある。その意味で、「まえがき」でもなく「あとがき」でもない、今後につながっていくはずのひとつのステップとして、「なかがき」と名づけてみた次第である。インタビューは続く。ゴールはまだ見えそうにない。北海道は広いから。そして、その広い北海道で行われている数多のミュージアムの魅力的な取り組みは、まだまだ汲みつくすことができそうにないからである。

謝 辞
北海道大学大学院文学研究院では、文化庁「大学における文化芸術推進事業」の助成を得て、
「プラス・ミュージアム・プログラム」に取り組み、地域の文化発信力の発展を目指しています。
本インタビュー・シリーズはその一環として実施されたものです。
インタビュー取材や写真提供にご協力いただきました下記の皆様に厚く御礼申し上げます。

矢野 ひろ（株式会社ノーザンクロス・NPO法人北海道遺産協議会）
持田 誠（浦幌町立博物館）
中村 圭佑（士別市立博物館）
山田 央（七飯町歴史館）
細矢 久人（苫小牧市美術博物館）
立石 絵梨子（苫小牧市美術博物館）

令和4年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業
ミュージアムにおける異分野との「対話」と「寄り添い」を通じた人材育成事業

プラス・ミュージアム・プログラム　インタビュー・シリーズ 1
『Insight on Site　地域社会とともにあるミュージアムの現場に学ぶ』

主　催　北海道大学大学院文学研究院
共　催　北海道大学総合博物館
助　成　文化庁「令和4年度 大学における文化芸術推進事業」

発行日　2023年3月25日
発　行　北海道大学大学院文学研究院
編　集　卓 彦伶　今村 信隆　佐々木 亨
執　筆　卓 彦伶　今村 信隆　佐々木 亨
アート・ディレクション　岡田 善敬
デザイン・制作　岡田 善敬　得能 涼加
印　刷　札幌大同印刷株式会社

HOKKAIDO UNIVERSITY

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

大学から文化力
POWER OF CULTURE